

星に促されてエルサレムにやって来た東方の博士達は、ヘロデ王に謁見しました。しかし、王はメシヤが生まれたことについては知らない様子です。ベツレヘムを出た博士達は、星に導かれ、ベツレヘムに着きました。そこで、ヨセフ、マリヤに守られた、みどりごである救い主イエス・キリストに会いました。彼らは、携えてきた黄金、乳香、没薬をささげたのです。

### 1. 主の使いの促し (13節)

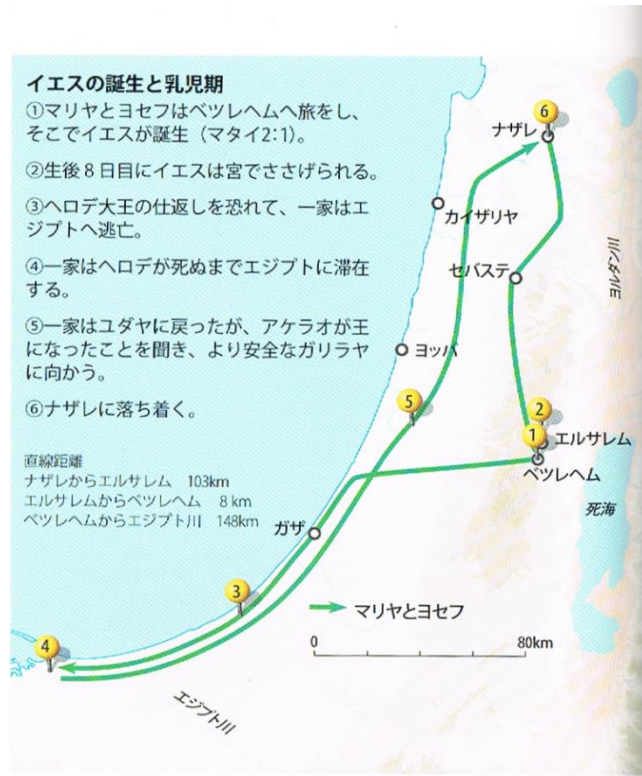
①主の使いが (13)「彼らが帰って行ったとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。」博士たちはヘロデ王の所にはもどらずに、まっすぐに東方の国に向かって行きました。さて、博士たちが帰って行った後に、ヨセフに主の使いが臨んだのです。1章をみると、ヨセフはマリヤが身ごもるといふ事態のなかで、離縁すら考えていました。しかし、その時に主の使いを通して、神さまはヨセフに語りかけられたのです。すなわち、その子は聖霊によって宿され、救い主となる子なのだと伝えられたのです。ですから、主はヨセフに再度語りかけられたということになります。

②エジプトへ逃げよ (13)「『立って、幼子とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい。』」今回、主が御使いを通してヨセフに言われた内容は、切迫した内容でした。つまり、今すぐに幼子イエスとその母マリヤを連れて、エジプトに逃げなさい、というものでした。創世記の時代、ヤコブの子ヨセフが兄弟達に売られて行った地もエジプトでした。それなりの距離があり、ヘロデ王の支配権の及ばない地がエジプトです。そこは外国ですが、生活の見込みが立ちやすい所ではありません。もちろん、エジプトの人々はその幼子がメシヤであるなどとは知りませんから、狙われる心配もありません。

③幼子を探し (13)「『そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を探し出して殺そうとしています。』」御使いは、御使いが改めて告げるまで、そこにいなさいということでした。その理由は、ヘロデ王がその幼子の命を狙っているからということでした。つまり、その幼子は自分と一族、国をおびやかす存在となる可能性があると考えたのです。主は王の思いを読み取って、予め危害から逃れる道を、御使いを通して示してくださったのです。

### 2. ヨセフの決断と出発 (14～15節)

①ヨセフは立って (14)「そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、」さて、ヨセフは御使いの促しを御心と信じて、すぐに行動を開始します。彼は立って、その夜のうちにエジプトに向かったのです。なにしろ妻マリヤと幼子イエ



スを連れての旅ですから、大きな決断でした。ナザレからベツレヘムへの旅以上に、不安も募ったことでしょう。しかし、余計な思い煩いはせずに、信じて歩み出したのです。それはアブラハムの信仰です。つまり、「行け」と言われて出ていく信仰です。

②ヘロデが死ぬまで (15)「ヘロデが死ぬまでそこにいた。」ヨセフとマリヤと幼子イエスは無事にエジプトに着きました。どのようにして生活を開始し、継続をする道筋を得たかなどは記されていません。主がその時、その場の必要を備えてくださったのです。ヘロデは紀元前3~4年に死んでいますので、ヨセフ一家のエジプト滞在は1~2年だったと思われます。

③ホセア書の預言の成就 (15)「これは、主が預言者を通して、『わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した。』と言われた事が成就するためであった。」ヨセフ一家がエジプトに避難したという出来事。それは小預言書の中のホセア書 11:1 に「イスラエルの幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した」とあり、それが成就したのだとあります。マタイの福音書はユダヤ人に向けて記されていますので、旧約聖書の裏付けは重要でありました。

### 3. ヘロデの蛮行 (16~18 節)

①ヘロデの怒り (16)「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。」ヨセフがエジプトに逃れた後、ヘロデ王は怒りました。博士達が帰りにやって来て報告をするという約束を破ったからです。ここに「だまされた」とありますが、これはヘロデの側から見たことで、博士達はヘロデの所に行くことを主から止められたのであり、だますつもりなどありませんでした。しかし、その結果ヘロデはとんでもないことを実行します。つまり、ベツレヘムとその周辺に住む、二歳以下の男の子をすべて殺すという大悪行です。博士達が伝えた幼子に関する情報に基づいたものでした。

②エレミヤ書の預言成就 (17)「そのとき、預言者エレミヤを通して言われたことが成就した。」ここでも、旧約の預言が引用されます。それが成就したということが強調されています。旧約の預言成就は、ユダヤ人に対する伝道という側面もありました。彼らには説得力のあるものだったのです。

③嘆き叫ぶ声 (18)「『ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。』」エレミヤ書 31:15 にはこうあります。「聞け。ラマで声が聞こえる。苦しみの嘆きと泣き声が。ラケ

ルがその子らのために泣いている。慰められることを拒んで、子らがいなくなったので、その子らのために泣いている」。ラマとうのはベツレヘムに至る街道沿いにある町。その人々の泣き声や叫ぶ声という預言は、そのかわいい子供達への悲劇を預言していたのです。ラケルはヤコブ (イスラエル) の妻。ヨセフとベニヤミンの母です。ベニヤミンを生んだ直後に命を終えます。ラケルはイスラエルの子孫たちの悲しい出来事を予見するかのよう泣いていたのです。その苦悩は慰めを拒絶するほどに大きいという預言は、ここに実現したのです。苦しく、つらい事でした。

《結論》もしこの時に、幼子イエス・キリストが命を終えたとしたら、どうなったで

しょう。キリストの愛の数々の愛のお働き、奇跡のみわざ、そして私達人間の

罪の身代わりとして、十字架上で犠牲の死を遂げられること、そして復活されるという機会は失われてしまったでしょう。また、人のかたちをとって現れてくださったキリストの存在を世の人々は知られなかったかもしれせん。

それほどに危機一髪でありました。ヘロデ大王は、何としても王として生まれたというその子を、幼子のうちになきものにしてしまおうと狙っていたのです。博士達から情報を得て殺す機会を見つけようと考えていたのです。ところが博士達はいつまでたっても、戻ってきません。怒り心頭に達し、ベツレヘムと近郊にいる二歳以下の男の子を皆殺しにさせたのです。しかし、その蛮行より、ほんのわずかだけ早く、ヨセフとマリヤと幼子イエスは、エジプトに逃れることができたのです。そこに至る主の恵みの導きと備えを考えてみましょう。

第一に、主は御使いを通して、ヨセフに促してくださったのです。ヨセフは地上において、イエス・キリストの育ての父として用いられた人物です。ヨセフに対して、主はすぐにエジプトに逃れるように命じられたのです。それは主から一方的に与えられた恵みの御手でした。主は私達にもそのような、恵みの導きを与えてくださる方です。霊の耳のアンテナを立てて、日々に歩んでいきたいものです。祈りましょう。聖書の御言葉を読んでいきましょう。

第二に、御使いを通して与えられた、お言葉に対して、ヨセフは即座に従ったということに注目しましょう。主から与えられた導きを聞いてから、時を移さずにヨセフは従いました。決断をこまねいていたとしたらどうだったでしょう。そうなれば、ヘロデの軍に捕縛され、キリストは命を落としてしまったかもしれません。ヨセフから学ぶべきことは、主の御言葉を受けてから、すぐに従ったということです。ぐずぐずしていたら、間に合わなかったかもしれません。アブ

ラハムも、行きなさいと命ぜられたときに、どこに行くのかを知らずに出発しました。私達は導きを知るにあたっては、様々な検討をする必要があります。信仰者の客観的意見、状況などを知る必要があります。そして、聖書を読み、御言葉をいただき、祈るによって確証を得ていきます。時間がかかる場合もあります。ただ、大事なことは、導きだとわかれば、従っていくことです。

第三に、キリストがその場を逃れたときに、失われた幼いたくさんの命のことを覚えます。彼らは、キリストが生きるために犠牲となった人々です。主は彼らに対して恵みの御手を伸ばされ、選びのなかにおいてくださったと信じます。「幼くして死ぬ、選びの民である幼児は、御自身がよしとされるとき、場所、方法においてお働きになる御霊を通して、キリストによって再生させられ、救われる」(ウエストミンスター信仰告白10章3節)とあります。彼らは犠牲となりました。その家族は耐えられないような悲しみと嘆きを経験しました。主なる神はそれをよくご存じて、恵みの中にあるものと信じます。

かくして、幼きキリストの命は守られ、その公生涯における御業を示し、ついに十字架にまで至り、贖罪の死を全うしてくださった後に、復活してくださり、人は信仰により救いをいただく道を開いていただいたのです。主を賛美！